

	甲 乙 第	号	氏 名	井 出 新
主 論 文 題 名： Localizing Christopher Marlowe A Study of His Life, Plays and Mythology (クリストファー・マーロウを文脈化する ― 彼の生涯、戯曲、神話に関する研究)				
(内容の要旨) 劇作家クリストファー・マーロウの生涯については殆ど何もわかっていない。彼に関する資料で残っているのは、教区記録簿の出生記録、若干の裁判記録、枢密院からの指令書、あるいは枢密院への報告書、検死官の報告書、そして彼の宗教的信条に関する伝聞証拠である。こうした非常に限られた資料から劇作家マーロウの全体像を描いた評伝を立ち上げるのは不可能である。しかしそのことは、マーロウ研究ではもはや評伝が有効なアプローチではなくなったことを意味するわけではない。むしろ近年の評伝研究の役割は、文学研究のみならず、マイクロヒストリー、社会学、解釈人類学などが実証してきたように、個人が行為者として深く関わった特定の社会的・文化的な場所 (locality) と、そこに形成された複雑な世界観や価値観を再構成することで、その個人や関係者が産出するテキストの意味を明らかにすることであり、その方法論はマーロウ研究にも応用することができる。 したがって、これからのマーロウの評伝研究が採るべき方法論は、残された資料に作品からの引用や様々な憶測を積み重ねて、推定上の全体像、すなわち「無神論者」で「転覆的」な劇作家というこれまでの定説をなぞることではない。むしろ今求められているのは、マーロウの所属が明確に検証されている場所や社会集団に着目し、そこで形成されていた集合的経験や価値観を明らかにするとともに、マーロウの関心や経験を再構成するというミクロ的な手法である。その際、本論文が焦点を当てるのは、彼が六年間を過ごし、枢密院との庇護関係を結んだことがわかっているケンブリッジ大学コーパス・クリスティ学寮の社会集団である。この学寮におけるいくつかの集団における政治的・文化的な傾向や対抗関係は、これまで精密に分析されてはこなかったが、本論文は、古文書で発掘した新しい資料を援用しつつ、そうしたミクロなレベルにまで踏み込んでマーロウの交友関係を跡づけ、枢密院顧問官による庇護の力を査定する。そしてそれを基に、マーロウをはじめとする大学出身者の文学作品やマーロウに関する言説を読み直し、これまでのマーロウに関する既成概念を解体し、等身大のマーロウを描き出そうとするものである。以下、章ごとに議論を要約する。 Part I: Life				

第一章 Reading the Social Space of Corpus Christi College

コーパス・クリスティ学寮というローカルな文脈にマーロウを位置づけるために先ず検討しなければならないのは、彼がこの学寮にやってくる 3 年ほど前の 1577 年に作成された学寮の部屋割表を詳細に検討することである。ノーフォーク古文書館に所蔵されたこの部屋割表には、詳細に学生や教員の名前が記されており、当時、どのように学寮共同体が構成されていたかを如実に知ることができる。第一章ではこの部屋割表が作成された経緯について検証し、ノリッジ文法学校出身の教員及び学生集団とカンタベリーのキングズ・スクール出身の教員及び学生集団に焦点を当てる。検証の結果明らかになったのは、学生たちが学寮長によって割り当てられた部屋から別の部屋へ移動しながら隣接するいくつかの部屋に同じ出身地同士の集団を築き、同じような属性や価値観を共有する者同士でつながろうとする傾向 (homophily) であり、その結びつきの強さである。その結束力は、奨学金や聖職禄、報償などによって恩義のある宮廷や地方の有力者への帰属意識で強められ、その一方で政治的・宗教的スタンスの異なる他集団との対立関係の原因となっている。マーロウが学生時代に関わることになったのも、そうした社会集団だったことが明らかにされる。

第二章 Nathaniel Woodes and the Corpus-Norwich Connection in the 1570s

コーパス・クリスティ学寮における学生と地方の有力者との政治的・宗教的結びつきを検証し、学寮の集団にどのような価値観が共有されているのかを明らかにするために、1570 年代コーパス・クリスティに在学したインターロード作者ナサニエル・ウッズに焦点を当て、貧しい学生が学寮時代に地方の有力者とどのようなコネクションを得、またパトロンの政治・宗教的イデオロギーを戯曲に反映させたかを考察する。それによって明らかになるのは、国教会に批判的なピューリタンの教員及び学生とノリッジ市議会内のパロンたちとの結びつきであり、ウッズのインターロード *The Conflict of Conscience* に反映されたノリッジ市議会におけるピューリタン勢力の政治・宗教的な主張である。これは 1570 年代のコーパス・クリスティ学寮において、ノリッジ出身の学寮長・教員・学生たちの集団が共有していた急進的ピューリタニズムや彼らの演劇的嗜好を示唆する。その後、マシュー・パーカー大主教の肝いりで 1573 年に学寮長になったロバート・ノーゲイトは、大主教の意にそって、国教会に従順な教員や学生を増やす人事的介入により、こうした学寮内の急進派勢力を弱体化させるが、1580 年代に礼拝堂建設計画で学寮の経済的状況を悪化させ、学寮内に新たな対立関係を生み出してしまう。こうしてこの章は、マーロウがコーパス・クリスティにやってきた 1581 年時点でのノリッジ出身者集団の結束と学寮長との対立関係を明らかにする。

第三章 Christopher Marlowe and the Community of Corpus Christi College

ケンブリッジ大学古文書館に所蔵された副学長裁判所記録簿には、大学関係者同士、あるいは市民との係争に関する裁判記録が収められており、学生たちの日常に関する詳細な情報を与えてくれるが、この章ではいくつかの裁判記録を参照することで、マーロウとカンタベリー出身の学生たちが、学寮生活での困窮を乗り越えるために、密接な互恵関係を築いていたことに注目する。そうした絆から育まれたカンタベリー人脈は、枢密院顧問官フランシス・ウォルシンガムにつながることを検証した後、マーロウが学生時代にウォルシンガムの送達吏として働いていた可能性、そしてまた、学寮内で当時勃発していたウォルシンガムとカンタベリー大主教ジョン・ホイットギフトとの代理戦争により、反ウォルシンガム派の教員・学生がマーロウに関する噂話を広めた可能性を探る。このローカルな文脈から、枢密院がケンブリッジ大学当局に宛てたマーロウに関する噂の沈静化を求める書簡の意味を解説していく。

Part II: Plays

第四章 University Playwrights in the 1580s and *Dido, Queen of Carthage*

枢密院顧問官ウォルシンガムから庇護を受けていたコーパス・クリスティ学寮の学生や教員たちの人脈は、パトロネッジの力学からマーロウの作品群を読む必要性を我々に迫ってくる。特にこの章は、当時、様々な神学論争によって大学教員や学生たちが分断されつつあった大学の環境において、大学演劇が以前にもまして政治的・宗教的プロパガンダの様相を呈していたことを検証する。そして 1570 年代から 80 年代における大学演劇の伝統において、エリザベス一世がカルタゴの女王ダイドーとして表象されることに注目し、『カルタゴの女王ダイドー』を大学演劇の伝統に倣す戯曲として位置づけ、ウォルシンガムをはじめとするプロテスタント武闘派のエリザベス一世の外交政策に対する不満を代弁する役割を担っていると結論する。

第五章 Chivalric Heroes, *Tamburlaine* and Militarizing London

マーロウが大学卒業後ロンドンで出会うことになった 1580 年代後半の演劇文化において、騎士道ロマンス物語が若年層の観客には大人気だったが、そのジャンルの枠組みをマーロウの『タンバレイン大王』も共有していることをこの章はまず指摘する。しかしこの作品の最たる特徴は、騎士道的英雄の主人公タンバレインが自らを神の「預言者」として位置づけ、自分自身の「ことば」を神の「ことば」と同一視する点であり、戦闘行為を神の名の下に正当化する点である。本章はこうした特徴を、ウォルシンガムをはじめとするプロテスタント武闘派が 1580 年代に説教壇を通して展開していた反ローマ

教皇反スペインの聖戦プロパガンダの文脈で理解する。それによって『タンバレイン大王』が国教会だけでなくプロテスタント急進派にも与えた大きな影響を検証しつつ、この作品にケンブリッジ大学で神学を志していたマーロウの聖戦理論に対する絶妙なスタンスを読み取る。

第六章 Struggles for Survival: *The Jew of Malta* and the Diabolic Power of Theatrics

1580年代後半、イングランド政府は大陸で訓練されたイエズス会宣教師の潜伏活動に危機感を抱いていたが、とりわけこうした渡英宣教師たちの演劇的振る舞い (theatrics) に対する警戒感は社会に蔓延していた。本章はそうした文脈から、演劇的振る舞いの力により周囲の人々を騙してマルタ島統治を目論む『マルタ島のユダヤ人』の悪党バラバスに注目して作品を読み解いていく。演劇的振る舞いとは劇作家や役者たちだけでなく、諜報活動に従事する者たちの生活手段でもあったため、バラバスの演劇的振る舞いは渡英宣教師のみならず、劇作家マーロウ自身、ひいてはローマ教皇とスペインに対して偽装的言説を用いるイングランド政府自体が暗黙のうちに用いる戦略でもあった。本章では作品にマーロウが演劇的振る舞いのメカニズムを解明していく態度を読み取り、経験知や実験・観察を重んじる『魔女魔術の暴露』の著者レジナルド・スコットをはじめとするカンタベリー出身の土木技術者たちとそうした態度を共有することに注目する。そして、社会のあらゆるレベルに存在する演劇的なからくり (theatrics) を科学的な目で分析しようとする劇作家／スパイの知的好奇心がマーロウに、転覆的な異分子の用いる演劇的策略だけではなく、それを占有して秩序維持を謀る体制側の宗教的偽善をも看破させた結論する。

Part III: Myths

第七章 Robert Greene the Mythmaker

マーロウの「恐るべき信条」に関するいくつかの伝聞証拠が真実かどうかを確かめるすべはない。本章と第八章では、そうした伝聞証拠の内容を事実として認定したり用いたりすることは避け、むしろそれらが1593年に突如として生まれてくる状況を精査し、なぜそうしたマーロウの思想信条に関する伝聞証拠、及び作品（とりわけ『フォースタス博士の悲劇』）に関する都市伝説が形成されたのかを様々な資料を基に考察する。その際に非常に重要になってくるのは、『ロバート・グリーン三文の知恵』（1592年出版）というパンフレットでマーロウを「無神論者」と最初に名指ししたライバル劇作家ロバート・グリーンである。本章ではグリーンが故郷ノリッジで、コーパス・クリスティ学寮の反ウォルシingham派の教員たちとグラマースクールの同窓生だったことを資料によって裏付け、学寮時代のマーロウに関する（歪められた）情報を入手しやすい立場にい

た点に注目する。その上で、グリーンが 1590 年前後から読者や観客に回心を訴える作品群の執筆を通して、自らを放蕩生活から立ち直った道徳的な劇作家として表象する一方で、新進気鋭の劇作家マーロウを自分とは対照的な「無神論的」で「マキャヴェリ的」な劇作家として攻撃対象にする必要が生じていたことを検証し、ノリッジ出身の劇作家グリーンの自己成型的な回心プロジェクトからマーロウに関する都市伝説的な神話が始まったと結論する。

第八章 Localizing the Marlowe Myth

『ロバート・グリーン三文の知恵』におけるマーロウへの言及が物議を醸している丁度その頃、カトリック論客ロバート・パーソンズがイングランド宗教政策を批判する文書の中で、「悪魔を召喚する魔術師が校長を務める」「無神論の学校」をウォルター・ローリー卿が主催しているという（根拠のない）話に言及する。それによって、1590 年代前半のイングランドにおける熱狂的な異端狩りを背景に、ローリー卿に疑いの目が向けられるようになることは勿論、悪魔を召喚する「魔術師」とは誰なのかが世間の関心を引くことになる。そんな折、マーロウを「無神論者」と名指ししたグリーンに続き、1593 年 3 月に騒擾罪で逮捕されたリチャード・チョムリーという人物が、尋問取り調べで「無神論の講義をローリー卿たちに行った」マーロウについて証言するが、本章はその尋問記録を読み直し、グリーンと言説の影響下で「魔術師」がマーロウだと考えられた可能性を指摘する。そして 5 月の殺傷事件によるマーロウの死によって、そうした一連の中傷的な噂話が「事実」として社会に認知され、「無神論者」への神の裁きという例証として流通することで、マーロウに関する神話が完成したと結論する。そして本章はさらに、『フォースタス博士の悲劇』を見た観客が本物の悪魔の登場でパニックに陥るという都市伝説の成立過程を、こうしたマーロウの神話と 1592 年から 93 年にかけてのペスト猖獗と絡めながら論じていく。

こうして本論文は、マーロウと作品、神話をローカルな文脈から読み解いていくことによって、それらがどのように様々な言説や人々の想像力によって構築されていったかを明らかにし、これまで一般的に定説として受け入れられてきたマーロウ像に再検討を迫るものである。

Thesis Abstract

No. _____

Registration Number	☐ "KOU" ☐ "OTSU" No. ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ *Office use only	Name	Arata Ide
Thesis Title			
Localizing Christopher Marlowe A Study of His Life, Plays and Mythology			
Thesis Summary			
<i>Localizing Christopher Marlowe</i> shares with biographers the critical assumption and conviction that the author-centred approach through historical materials is still indispensable to understanding Marlowe and his literary output. Of course, it would be in vain, an illusion, to seek to reconstruct a complete figure of Marlowe with an extremely limited volume of his biographical documents. We have to confess that we know next to nothing about his life. In fact, few biographical documents survive, other than his birth record in the parish register, a handful of injury and pecuniary cases in court records, mandates of, and reports to, the Privy Councillors, the coroner's examination of his death, and a few hearsay accounts of his religious beliefs. Moreover, the evidence is often fragmentary, discontinuous, and contradictory; thus, the task is too difficult for Marlowe's biographers to fully reconstruct his whole life. However, this does not mean that the biographical approach no longer assumes a significant role in Marlowe studies. Rather, as several scholars argues, a biographer today can assume a challenging role, similar to that of a micro-historian, a sociologist, or an interpretive anthropologist, in reconstructing the value systems of the specific social and cultural locale into which the person concerned is deeply integrated as an agentic 'actor', and in elucidating how the meanings of the texts he/she produces are socially interpreted and reproduced within their complicated systems of beliefs and values. It would be well worth trying, therefore, to reduce our scale: to observe the details of the specific locale and its community that surely cultivated a sense of belonging in Marlowe on the basis of his habitation and his camaraderie, and to recover the collective experiences of the social groups or small communities with which we know he was personally and financially involved. Adopting this micro-biographical approach, <i>Localizing Christopher Marlowe</i> offers 'thick descriptions' about the fragmentary documents relating to Marlowe's life, as well as about his literary output, based on its locally and temporally specific contexts. By investigating a number of detailed fragments in archives neglected so far, this micro-biography uncovers important facets of his college and social experience: the dynamics of local politics and culture into which Marlowe was deeply integrated as a social and literary agent. Moreover, it affords us a deeper understanding of the social and cultural function of literary discourses of and about the playwright, and revises the biographical stereotypes we hold of Marlowe.			